

伊藤為吉	村松貞次郎	日本近代
職工軍団		

【序論】研究目的

伊藤為吉¹という人物がいた。明治24年濃尾地震をきっかけに伊藤は木造家屋の耐震化への取り組みを始めるが、官による耐震化が制度化されることで身を引かざるを得なくなり、その血の気の多い性格上、耐震化に注いだエネルギーを発明や社会事業などにまわすことになる。というのは村松貞次郎²の述べる伊藤像である。³近代化の過程において、様々なことに手を出して夢に生きた生涯を、やわらかい人生としている。しかし伊藤の自伝を読んでいると、伊藤の目指したところはもっと別にあるように感じられる。この村松の伊藤評価に対する違和感から、本論文の目的を、伊藤の存在をより適切に評価することとする。

研究方法

本研究では伊藤の自伝「借財五十年」⁴を主に分析考察していく。伊藤はこの自伝が出版されれば、労働問題に対して社会事業的な意味を持つと考えていた。しかし結果的にそれはかになっていない。本論文においては伊藤が何を社会に伝えようとしていたかが重要であるとし、「借財五十年」に書かれている内容をもとに伊藤の再評価を行いたい。

【本論】

第1章 「借財五十年」について

自伝「借財五十年」は「仁」「義」「禮」「智」「信」「和」の全6巻で編成されるとし、この内「仁」「禮」「智」の3巻が現存しているが「他の巻の存在も、あるいは実際に書かれたかどうかも知らない。」⁵現存している「仁」之巻10冊、「禮」之巻11冊、「智」之巻2冊、全23冊は昭和7年10月頃⁶から翌8年6月の8ヶ月間に執筆されている。この間に二百字詰原稿用紙2千枚余を毛筆で書上げている。

■書誌情報

〈現存する3巻〉

・「仁之巻」: 出生から70歳に至るまでの経歴。全10冊、1002頁。第1冊が昭和7年25日、最後の第10冊が同8年5月31日脱稿となっている。本論巻末全文掲載。

2013.11.14
中谷研究室歴史工学ゼミ
1x10a137-1 廣瀬翔太郎

- 「禮之巻」: 千人画伯展について他。⁷全11冊、867頁。第1冊が昭和7年10月8日、第10冊が同8年6月3日脱稿となり最後の第11冊が脱稿日の記載無。
- 「智之巻」: 設計した建物、発明物の紹介。全2冊、148頁。脱稿日の記載無。
- 〈存在がわからない3巻〉⁸
- 「義之巻」: 職工軍団など職工教育について。全2巻。
- 「信之巻」: 職工教育の資金にするため蒐集した古銅器。
- 「和之巻」: 伊藤の家族のこと。

■執筆の理由

伊藤は自らの理想事業を職工教育活動と述べるが、その資金を得るために行った様々な事業や、その過程で得た特許を世に示そうと考えていた。それは伊藤が職工教育から派生して当時起こっていた労働問題に関心を持つことになるのだが、問題を抱える人々にこの事業を示し、特許を与えることで社会事業にしたいとしていたためと自伝内に述べられる。⁹ではなぜ執筆に至ったのか。次章で「仁之巻」に描かれる生涯を追いながら分析する。

第2章 「仁之巻」に見る伊藤像

本章では「借財五十年」の内、「七十歳に至る間の奮闘史」¹⁰にあたる「仁之巻」全10冊の内容分析を行う。また、この自伝が書かれた後の伊藤史を補完するものとして職業指導に関する雑誌掲載記事¹¹をまとめる。「仁之巻」は村松も「もっともつかわして頂いた」¹²としている。村松の描く伊藤像をはじめに述べ、本章の分析と比較する。

■伊藤為吉七十年史

「仁之巻」は伊藤の自伝執筆時までの生涯である。村松のこの伊藤の生涯に対する評価は「互いに無関係で統一されるところがなく、衝動が通りすぎれば手をつけたものも未完のままで放り出されて一貫性を求める事も無く次ぎの衝動に走り出す。」¹³である。実際にそうなのか。「仁之巻」に見られる伊藤七十年史の根幹は以下ようになる。

- 明治24年の濃尾地震に木造耐震化において官の進める耐震化の陰に身を引く。
- 施工する職工を教育しなければならない状況に気付く。それを通して、当時職工達がその社会を崩壊させていることを知る。
- 一見「互いに無関係」な伊藤の活動は全て、以後職工教育を意識されることになる。

伊藤は自伝内で「理想事業」という言葉を多様するが、自伝からは職工教育のことを指していたと感じられる。執筆理由にも述べられる。しかし村松はそれを、自伝執筆後に取り組む「永久運動

機関の発明」¹⁵としている。理想事業を職工教育とすることで伊藤の多岐に渡る活動が一貫性を持って把握できる。

第3章 職工軍団と時代背景

職工軍団とは伊藤が自身の建築事務所の施工部隊として率いた組織である。本章では伊藤の人物関係から職工軍団が存在した当時の時代背景を描き、この組織が救世軍¹⁶を模すことになる必然性を述べる。そして、伊藤が職工教育を理想事業として、生涯気にかける過程を考察する。



図3 職工軍団の制服

■職工軍団について

伊藤は明治22年に建築事務所を設立しており、その頃より設計施工を手がけている。事務所に出入りしていた職人達が職工軍団団員に繋がったと思われる。また伊藤はキリスト教信者であり、¹⁷イギリスで当時起こっていた救世軍を日本にも同化させたいとして救世軍的にこの組織を率いると述べている。¹⁸

■人物関係から見る時代背景

伊藤の職工教育活動を支持する者の中に片山潜¹⁹・山室軍平²⁰といった社会運動家が多く見られる。彼らは伊藤の活動と同時期にそれぞれ労働者層に対する社会運動を開始している。

■職人社会の変化

江戸時代は“職人の世紀”と呼ばれるほど高度な技術を有し、得意先との結びつきや株仲間のような閉じた世界ではあるものの、あくまで義理と人情で仕事を勝ち取る世界であった。²¹しかし明治期に入ると、会計法の公布により競争入札が開始され、また株仲間の解体が行われると職人社会は崩壊する。資本主義体制への移行で職人は、請負師のもとで仕事さえ早く出来れば良いという存在に成り下がってしまった。²²

第4章 考察 職工軍団の意義

■近代化が必要とした宗教倫理

近代資本主義がプロテスタントの中から生まれたとするマックス・ウェーバー²³の論を引用する。ウェーバーは、労働者が働くことと神への信仰を同一視する宗教倫理が存在するところに、近代的な資本主義の成立があると述べる。²⁴宗教倫理と近代資本主義はもともと一体のものであった。明治期に職人とは無縁の資本主義体制下でその社会を崩壊させることになる。健全に資本主義が機能するには宗教倫理を必要としていた。伊藤はこのような境遇にあった職人達を、救世軍（プロテスタントの一派）的職工軍団によって率いた。宗教倫理が無いことへの違和感を感じていたと言える。

■考察 職工軍団の意義

伊藤が率いた職工軍団がどの程度救世軍的であったのかは正確にはわからない。しかし資本主義下の職人社会において宗教倫理が無い事への違和感を感じ続けた。そのことが職工教育を理想事業として生涯気にかけることになる。また、日本の労働組合史上早稲田大学創造理工学研究科 学部4年

記念碑的な意味を持っていたと思われる。伊藤が職工軍団創立主意書を提出した5年後、日本初の労働組合とされる職工義友会²⁵が設立される。前述の片山潜は同会幹事。職工義友会は明治23年米国サンフランシスコにて組織され、後に東京で再建された。サンフランシスコは伊藤が滞在し、日本人実業会²⁶を組織した土地である。伊藤は明治20年に帰国しており直接的な関係があったかは不明だが、少なからず関係があったと思われる。そして職工軍団は労働組合的組織に倫理を持ち込もうとしたことが特異な点である。

十分な検討がなされないまま新しいものが既存のものに取って代われそれを繰り返す現在、伊藤が新しさと既存の間で行ったことはとても重要な意味を持っている。そして、描かれるべき伊藤為吉像である。

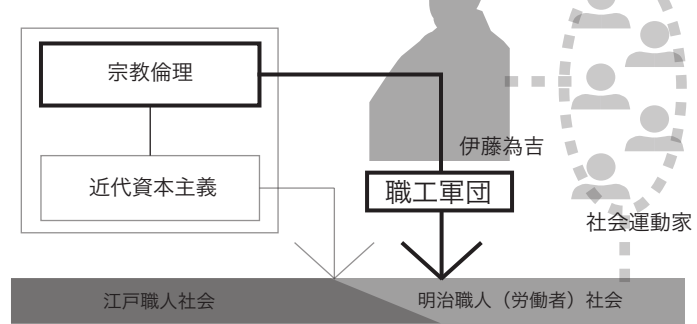


図4 近代化において伊藤が持ち込もうとしたプロテスタントの宗教倫理

結論

伊藤の自伝「借財五十年」を通して、伊藤像の分析を行った。木造家屋の耐震化過程で職工教育の必要性に気付き、生涯それにつながる活動をするようになることが分かったが、それが村松の描く伊藤像との違いであった。

また救世軍を模して職工軍団を率いた事は、資本主義体制という職人とは無縁な状況下でその社会が崩壊し、宗教倫理の無さに違和感を感じたからと言える。

註釈 11864-1943。21924-1997。建築史家。**3** 村松貞次郎『やわらかいものへの視点 異端の建築家』（1994、岩波書店）参照。**4** 伊藤為吉による自伝。**5** 前掲 p232。**6** 最初の1冊の脱稿日が昭和7年10月25日と記されているが書き始めた日は不明。同8月15日にアメリカから帰国しており、その後執筆が始まっている。**7**。千人画伯展とは、伊藤が職工教育の資金を得るに行った蒐集した日本画の展覧会。「禮之巻」には他にも、滞米時に邦字紙に連載した記事、息子への手紙などが記載される。**8** この3巻については「仁之巻」十巻 p965-p971「借財五十年全編目次を語る」に記載の書かれたであろう内容を抜粋。**9** 前掲十巻 pp932-938 参照。**10** 前掲十巻 p963 より。**11** 伊藤為吉「熟練工の取り扱いに就いて」職業指導 10月号（1932）,「最近に於ける地方連絡職業紹介に就いて」職業紹介 6月号（1933）,「〔職業紹介事業二十年の回想〕懐古断片」職業紹介 10月号（1936）,「引揚者の職業安定とその指導」職業指導 11月（1949）,「女子の求人・休職についての最近の状況」職業指導 8月号（1949）,「失業の重圧・我らの反発」世界評論 8月号（1949）がある。**12** 前掲 p232 より。**13** 前掲 p232 より。**14** 前掲 p107 より。**15** 前掲 p171 参照。**16** 軍隊流に社会事業を行うプロテスタントの団体。**17** 伊藤は明治21年に家族全員で洗礼を受けている。**18** 前掲三巻 pp242-244 参照。他にも数名が自伝内に登場する。**19** 片山潜 1859-1933。労働運動家。**20** 山室軍平 1872-1940。宗教家。**21** 村松貞次郎『日本近代建築技術史』（1976、彰国者）p95「大工の技術」、p163「建設業と施工技術」、稲垣栄三『日本の近代建築（上）』（1979、鹿島出版）p155「建設企業の成立」参照。**22** 横山源之助『日本の下層社会』（1949、岩波書店）p81「職人の社会」参照。**23** 1864-1920。ドイツ人社会学者。**24** マックスウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1989、岩波書店）参照。カルヴァンの予定説では救済される人間は決められており、人々は救済される人間であれば神の御心に適うことを行うはずだという論理を生み出す。そして信仰と労働のみに集中する禁欲的労働を行う。また信仰と労働は得た利益の多寡に比例するため、利潤の追求の正当化がなされる。禁欲的であるため利潤の浪費はせず、利潤追求のために投資され近代資本主義に繋がるとする。**25** 後の労働組合期成会。**26** 伊藤が明治18年サンフランシスコで設立した、在米日本人のために職業斡旋を目的とした組織。**図版出典** 1前掲 p6より。2前掲 p153より。**3** 伊藤為吉『新式大工法全』（1935、丸善）p33より。**4** 筆者作成。

Undergraduate student of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.

■論文目次構成

- 【序論】
- 0-1. 研究背景
- 0-2. 研究目的と方法
- 0-3. 既往研究と本論の位置づけ

0-3-1.伊藤為吉について

0-3-2.職人の社会について

- 【本論】
- 第 1 章 「借財五十年」について
- 1-1.はじめに
- 1-2.執筆の理由
- 1-3.各巻書誌情報

1-3-1.本編「仁之巻」

1-3-1-1.本編「仁之巻」全目次

1-3-1-2.本編「仁之巻」

1-3-2.「禮之巻」

1-3-3.「智之巻」

1-3-4.「義之巻」

1-3-5.「信之巻」
- 1-4.小結

- 第 2 章 「仁之巻」に見る伊藤像
- 2-1.はじめに
- 2-2.村松による伊藤史
- 2-3.伊藤為吉七十年史
- 2-4.その他記載情報
- 2-5.職業指導に関する提言
- 2-6.小結

- 第 3 章 職工軍団と時代背景
- 3-1.はじめに
- 3-2.職工軍団について
- 3-3.人物関係から見る時代背景
- 3-4.職人社会の変化
- 3-5.小結

- 第 4 章 考察 職工軍団の意義
- 4-1.はじめに
- 4-2.近代化が必要とした宗教倫理
- 4-3.考察 職工軍団の意義

巻末資料―「借財五十年」仁之巻全 1 0 巻

表 伊藤為吉関連略年譜（筆者作成）

年代	数え 齢	事 項
1864（文久 4）	1	文久 4 年正月 1 7 日（太陽暦 1 8 6 4 年 2 月 2 4 日）、伊勢国松坂近郊塩鼻村に生まれる。父弁治郎、母家寿（やす）の長男。
1871（M 4）	8	伊勢山田町に移る。
1879（M12）	1 6	馬車代用機械車を発明。実用ならず。
1882（M15）	1 9	上京。同郷の尾崎行雄宅に書生となる。菊池松軒の漢学塾で幸田成行（露伴）、郡司成忠兄弟らと会う。工部大学校の自称「自由研究生」となり機械学を学ぶ。
1883（M16）	2 0	芝新銀座の近藤真琴の功玉社に学僕となる。
1884（M17）	2 1	洋行（米国）を志し、国許より父母を迎える。同宿の片山潜を米国に先行させる。
1885（M18）	2 2	一月横浜港。二月八日桑港着。同地を中心に二年ニヶ月滞米。雜貨行商、建築事務所の図工など苦学する。「日本人実業界」を組織する。
1886（M19）	2 3	帝国大学設立（3 月）。造家学会（現に本建築学会）設立（4 月）。近藤真琴死（1 8 3 1－）。
1887（M20）	2 4	四月帰国。九月東京でクリーニング工場を始め（伊藤組洗染所）、また洗剤を売り出す。家具製作を始める。
1888（M21）	2 5	キリスト教徒となる。（家族全員）。特許条令・意匠条令公布（1 2 月）。
1889（M22）	2 6	駒込教会堂を建てる。第二帝国憲法発布（2 月）。3 月 2 5 日駒込教会堂で飯島喜美栄と結婚。伊藤建築事務所を設立する（9 月）。芝愛宕ホテル及び 5 階の愛宕塔を建てる。（ホテルは 8 年後廃業。塔は関東大震災で倒れたと言う）。長女嘉子出生（1 1 月）。
1891（M24）	2 8	濃尾地方地震（1 0 月 2 8 日）。濃尾地震被災地視察。『日本建築構造改良法 完』を著わす（1 2 月）。
1892（M25）	2 9	長男晃一出生（1 月、夭逝）。『震災予防調査会』設置（6 月）。『地震・水害・暴風安全家屋』農商務省特許（9 月）。1 1 月「職工軍団」創立趣意書発表。
1893（M26）	3 0	「地震建築に関する工夫片々」（論文、『建築雑誌』1 月号）。次男道郎三崎町の三角長屋で出生（4 月 1 3 日）。郡司成忠らの報効議会の千島探検に、発明の「耐寒家屋」（組立式）を寄贈。3 時間で組立て完了と感謝される。
1894（M27）	3 1	日清戦争始まる（8 月）。『木工術教科書』著わす（8 月）。三菱 1 号館煉瓦工事を、職工軍団を率いて請け負う。他に英和女子学校職業部、日比谷の裁判所、鳥居坂の日本メソジスト教会などの工事に参加。山形県酒田地方自身（1 0 月）。銀座服部時計店を建てる（大正 1 0 年撤去）。コンドル設計の三菱 1 号館竣工。
1895（M28）	3 2	三男鉄衛出生。神田三崎町に「地震・水害・暴風安全家屋」を建て、3 4 年まで居住する。四国今治の山室軍平、「職工徒弟学校」入学を希望して上京、伊藤家に入る（1 0 月末ごろ）。「耐震的鐵具使用の困難を論して木製組組法の完成を期せむとす」（論文、『建築雑誌』1 1 月号）
1896（M29）	3 3	辰野金吾の日本銀行本店竣工（1 月）。6 月 1 5 日、三陸地方に大津波。死者 2 万 7 千余人。流出半壊家屋 1 万余戸。「職工徒弟学校」設立趣意書発表（1 1 月）。募金のための第 1 回音楽演芸会開催（1 2 月）。山室軍平、救世軍軍士官となる。片山潜、帰国。『海嘯被害建物の調査に就て』（論文、『建築雑誌』1 2 月号）三崎町 3 丁目に、1 号から 4 号までの標本家屋を建てる。四男裕司出生。
1897（M30）	3 4	『建築造営主心得書』発行（2 月）。第 2 回音楽演芸会開催（3 月）。高野、城、沢田ら労働組合期成会を設立（7 月）。原胤昭「東京出獄人保護会」設立。
1898（M31）	3 5	震災予防調査会囑託（1 0 月 3 1 日ー3 3 年 1 2 月 3 1 日）。佐久間貞一死（1 8 4 6－）。父弁治郎死（1 8 3 0－）。
1899（M32）	3 6	「木造耐震家屋の定規を述べ耐震建築上木材の性質を論す」（論文、『建築雑誌』4 月号）。五男薫朔出生（8 月 1 日）。「職工徒弟学校設立趣意書、同設立時歴等」（『実業教育』臨時増刊、9 月 2 9 日号）。第 3 回演芸会（大阪青年歌舞伎一座）開催（1 0 月）。新橋博品観工場を建てる（1 0 月）。
1900（M33）	3 7	糖尿病と診断される。両方として義太夫を始める。人力車製造合資会社工場を買収。三崎町標本家屋を売却。
1902（M35）	3 9	次女暢子出生（1 月）。
1903（M36）	4 0	長野県南佐久郡大日向山の平板石採掘権を買収。「天平石」と命名する（1 0 月）。日本最初の鉄筋コンクリート橋（琵琶湖疎水運河）。
1904（M37）	4 1	日露戦争始まる（2 月）。村井商会柴田町の煙草工場を設計、春竣工する。巻煙草包装機械を発明。六男園男国府津で出生（7 月 1 5 日）。
1905（M38）	4 2	三女愛子出生（7 月 7 日）。
1907（M40）	4 4	七男忠雄出生（2 月、夭逝）。『千人画伯絵画展』、帝国五二館で開催（4 月ー8 月 3 日まで）。『職工新聞』創刊（1 2 月 1 0 日第 1 号、1 9 1 2 年廃刊）。
1908（M41）	4 5	八男貞亮出生（8 月 3 日）。
1909（M42）	4 6	赤坂離宮竣工（6 月）。「職工教育実施会」発会（7 月）。
1911（M44）	4 8	九男翁助出生（2 月 2 6 日）。
1912（M45/T1）	4 9	東京市役所囑託技師となる（水道局。3 月ー大正 3 年 1 1 月）。道郎ドイツ留学へ出発（1 1 月 6 日横浜出帆）。
1914（T3）	5 1	第一次世界大戦（ー1 9 1 8）始まる。
1916（T5）	5 3	佐野利器『家屋耐震構造論』を発表。
1917（T6）	5 4	コンクリート製造研究所を設ける。内幸町ガード下（3 月）。仁寿生命会社用地で可撓性鉄筋コンクリート電柱の公開試験（1 1 月 2 4 日）。
1918（T7）	5 5	上野不忍池畔電気博覧会に可撓性鉄筋コンクリート電柱出品（4 月）。母家寿死（1 8 3 4－）。
1920（T9）	5 7	「極東コンクリート工業株式会社」設立趣意書を作成。
1921（T10）	5 8	高田商会とコンクリート製造株式会社を共同で始める（7 月）。伊藤技師長。工場芝区月見町。
1923（T12）	6 0	関東大震災（9 月 1 日）に既に竣工していた伊藤式コンクリート塙など、殆んど無被害と自讃。暢子、中川一政（3 0 歳）と結婚。
1924（T13）	6 1	『耐震耐火家屋建築』を著わす（6 月）。郡司成忠死（1 8 6 0－）。
1926（T15）	6 3	伊藤式コンクリート製造所を独力で始める（6 月 1 6 日より）。
1927（S2）	6 4	六男園男、モスクワ經由ベルリン遊学へ出発（4 月、1 9 3 1 年 1 1 月、帰国）。染井墓地に「伊藤家之霊舎」を建立。伊藤式コンクリート製造所施行（8 月）。
1930（S5）	6 7	古銅器コレクションを携えて横浜出発（2 月 1 4 日）。」桑港着（3 月 3 日）。ロサンゼルス州立博物館で古銅器展がオープン（5 月 2 7 日）。北伊豆地方地震（1 1 月）。
1931（S6）	6 8	道郎アメリカから舞踏団をつれて一時帰国。朝日講堂で講演（4 月）。
1932（S7）	6 9	上海事変（1 月）。犬養毅死（1 8 5 5－）。退去を命ぜられ、アメリカより帰国。横浜着（8 月 2 5 日）。自伝メモ（「借財五十年」仁・禮・智之巻）この年、1 0 月ごろより執筆。8 年 5 月末脱稿。
1933（S8）	7 0	大阪に「研究所」を設け、無限動力機関の発明に没頭する。片山潜死（1 8 5 9－）。
1934（S9）	7 1	室戸台風（9 月 2 1 日）。その被害復興に対して、「家屋構造の常識」を NHK 大阪より放送（1 0 月 1 5 日）。
1935（S10）	7 2	『新式大工法 全』を出版（6 月）。日本工業新聞社主催、大阪工業博覧会に新式大工法部品標本を出品（1 0 月）。
1937（S12）	7 4	盧溝橋事件、日中戦争始まる（7 月）。
1938（S13）	7 5	『組立混凝土建築二就テ』を発行（3 月）。
1939（S14）	7 6	道郎以下、子供達両親の金婚を祝ってリサイタルを催す（1 1 月）。
1940（S15）	7 7	嘉子の夫、陸軍大将古荘幹郎病死（7 月 2 1 日）。山室軍平死（1 8 7 2－）。
1941（S16）	7 8	東条内閣組閣（1 0 月）。大東亜戦争始まる（1 2 月）。
1942（S17）	7 9	ミッドウェー海戦（6 月）。『防空に関する新考案の発表』（『建築と社会』誌 7 月号）。『世に関する新考案の発表』6 巻にまとめる（筋書きは 9 月）。妻喜美栄、薫朔の家で死去（1 2 月 2 6 日。7 8 歳）。原胤昭死（1 8 5 3－）。
1943（S18）	8 0	山本五十六戦死（4 月）。5 月 9 日大阪で没する。8 0 歳。道郎、第二次交換船で帰国（1 1 月）。